



御布達
規則抄
貸借必携

内澤畏三編輯

四

8

711
1603
8



身分ノ書付ヲ取タル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラバ其書附ヲ取ルニ及ハス住所トハ某^府管下某國某郡某^町村住居又ハ寄留ト記スノ類

身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類

若シ一戸ノ本主ニ非シテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某ノ厄介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ^町役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書附ヲ取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場

文通ノ入費ハ原告人ヨリ償フ可シ

但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ所ヲ訴狀中ニ記載レ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

第三條 原告人訴狀ヲ作ルハ必ス代書人ヲ撰ミ代書セシメ自ラ書スルコトヲ得ス但シ從前ノ差添人ヲ廢シ之ニ代ルニ代書人ヲ以テス

第四條 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付被告人ト往復スルノ文書モ亦代書人ヲ以テ書セシメ且代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ若シ代書人ヲ經ナル者ハ訴訟ノ證ト

為スコトヲ得ス

第五條 代書人疾病事故アリテ之ヲ改撰スル時ハ即日頼主ヨリ裁判所ニ届ケ且ツ相手方ニ報告ス可シ其裁判所ニ届ケス被告人ニ報告セザル以前ハ假令代書スルモ代書人ト看做スコトヲ得ス

但外國人ハ此章ノ限ニアラス

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト為スヘキ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述ルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身

分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スベシ 附録第一号ヲ見合スヘシ

但外國人ニ為シハ第一章但書ハ見テ可シ

第三 訴狀ハ末ニ署スル氏名ハ其本人自書スヘシ若シ自署スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認ノ正副二通ヲ具ス可シ

但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手

敷料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ其本人自書スルハ可シ貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過ギテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ附録第一号ヲ見合スヘシ

田畠ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意并願意ヲ簡明ニ記載スヘシ

但附録第十八号ヲ見合スヘシ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持参金又ハ實家若
クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴状モ亦本條
ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴状

賣掛代金淹滞ノ訴状モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次
ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ證印アルコトヲ
記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書ス可シ附録第三号
ヲ見合スヘ

賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告人
ノ證印ナキ時ハ原告人ノ證據ト為スヲ得ス

第十條 手附金賣買違約ノ訴状

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サシ
トスル時ニ至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サハルノ訴
状モ住所氏名ノ次ニ買付タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ
渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取ヘキ約定期
限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定期書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違
約ノ事情ヲ書ス可シ附録第四号ヲ
見合スヘ

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受
取ルヘキ時ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サハルノ訴状モ
住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ
受取リ物品ヲ渡スヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ
約定期書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ附録
第五

号ヲ見合
スヘシ

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年
月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラ
ザル金數トヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違
約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ
出テ還ラザル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ
次ニ抱入レタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數ト
ヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ

書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年
期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ
訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ルヘキ
給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ模倣密賣スル者ヲ差留
メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル
年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ
標記シ次ニ免許ノ證印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ

事情ヲ書スヘシ

諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨
アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルコトヲ得ズ

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金
又ハ物品ノ類ニテ乘合高賣ト稱スル者モ證書確實ナル
者ハ之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ
各種ノ本條ニ照ス可シ

先ニ開キシ商社ニ後ニ関カントスル商社ノ妨グルコト
アルヲ以テ之ヲ訴ルコトヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯ス
ヲ得ザルノ法ト相抵觸スルコト無ル可シ

第十三條ヲ
見合スヘシ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及
婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場ニ届置持タル戸
籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ノ為メ可キ理由ヲ書ス本條
原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラザレハ祖父母祖父
母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同
等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親アラサレハ近隣又
ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ為メ可シ 附録第六号
ヲ見合スヘシ
原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴フ可
シ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ラ訴

事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ノ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ
養子女ノ生年ト其養子女トナレタル年月日ヲ標記シ次
ニ原被雙方ノ戶籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ原由ヲ
書シ原告人親族在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上
ノ與書連印ヲ為スヘシ
本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ
照スヘシ若シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルコトヲ
得可シ
養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ

為スヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ノ争ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ
年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ
其原被双方ノ戶籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全
文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告人相續スヘ
キ條理ナキコトヲ書ス可シ
附録第六号ヲ
見合スヘシ

第十八條 田畠山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀
及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一
項ニ照ス可シ

田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取
トスルノ訴状モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ争フノ訴状

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ争フ訴状モ住所氏名ノ次
ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス
可シ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト為シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス
可シ

繪畚ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用テ被告
ノ區域ハ黃色ヲ用テ争フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他
ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ 附録第七号ヲ見合スヘシ 但第七條但シ書

第二十條 控告ノ訴状

原被告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セ
スニテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴状ハ住
所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サ
レタル度數其年月日ト訟庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ
知ルヲ得ヘキニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ
寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴状ノ寫ヲ
別冊ト為シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ為ス裁
判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶預ヲ得ルノ外裁決ノ言
渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ為ス

債權訴訟法

コトヲ得ス

預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ由庇
歴制等アルヲ以テ原被告人之ヲ上等ノ裁判所ニ申告ス
ル者セ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴状ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ラス訴状ハ一事ヲ
一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ全時ニ數
件ヲ訴フルモ訴状ヲ各冊ニ作ル可シ

第六章 一冊ノ訴状ニシテ二件以上ヲ合スルヲ得ル
事

第二十二條 貸借二事以上ニシテ原被告人共別人ニ非レ

ハ一冊ノ訴状ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ヘシ

第七章 原告人連名ノ訴状ノ事

第二十三條 債主連名ノ證文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴
状ハ連名ヲ以テ訴フヘシ若シ債主連名三人ナラバ一人
ニシテ訴フル時ハ他ノ二人ヨリ依頼ノ證書ヲ以テ訴フ
可シ附録第八号ヲ
見合ヌヘシ

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニマル者アラ

ハ甲ノ管轄ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴フルモ其便宜ニ從
フ可シ

第八章 連名ノ被告又ハ訴フル事

第二十五條 負債主連名及借用證文ヲ以テ貸渡シタル米

金等ノ訴狀ハ連名ノ人数ヲ盡テ相手取ル可シ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナ

キ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等

ノ事ヲ其者ノ管轄戸長某ヨリ承ルト附載スヘシ附録第九号ヲ

見合ス可シ

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲

ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願モ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願

フモ原告人ノ情願ニ任ス可シ

第二十八條 讓證文ヲ以テ訴ル事

甲ヨリ乙ニ貸シ又ハ預ケタル米金ヲ甲ヨリ

丙ニ讓リタルニ乙ヨリ丙ニ返濟セシテ丙ヨリ乙ヲ相

手取り其米金ヲ受取ントスル 訴狀モ住所氏名ノ次ニ

甲ヨリ丙ニ讓リタル證文ヲ寫載シ若シ甲ヨリ丙ニ讓リ

タル證文無レハ甲ト乙ノ關係ニシテ乙ト丙トノ關係ナ

シトス故ニ丙ヨリ乙ヲ相手取ルコトヲ得ス附録第十号

見合スヘシ

第二十九條 父母祖父母等ノ貸附タル米金等ハ其家ヲ相

續ヲ為シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持

スト雖モ父母祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ

訴ルコトヲ得ス

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得ヘシ

第十章 代言人ノ事

第三十條 原告人ノ情願ニ因テ代書人ヲシテ代書セシムルコトヲ許ス代書人ヲ用フル者ハ其訴状ニ與書ニ代書人ニ依頼シタル旨ヲ記載シテ原告人及ヒ代書人ノ連印ヲ為スヘシ若シ連印ナケレハ代書セシムルコトヲ許サ
人 附録第十一号
見合ス可シ

第三十一條 原告人代書人ヲシテ代書セシムル時訟庭ニ同席スル事ハ其情願ニ任カス

第三十二條 訴訟ニ関係スル書類ハ代書人又ハ保證人ノ類ト雖モ原告人ノ證ト為ルヘキ者ハ原告人ノ撰ヒタル代書人ヲシテ代書セシム其代書人ノ氏名ヲ記入セシム可シ原告人ノ自書ヲ用フルコトヲ得ス

書面ニ朱ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ若シ本人自署スルコト能ハザレバ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ
但第二章但シ書ヲ見ルヘシ

訴訟中原告人又ハ代書人ノ疾病事故ニ因テ假リノ代書人ヲ出ス時ハ原告人又ハ代書人ヨリ假リノ代書人ニ依頼スルノ證書ヲ出ス可シ若シ證書ナケレハ假リノ代書人ト為スコトヲ許サス
附録第十二号
見合スヘシ

第二章 被告ノ答書
第一章 答書ノ定則ノ事
第三十二條 答書ヲ作ルハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出状ト共ニ原告人ノ訴状ヲ受
取ル時原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原
告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於
テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ニ裁
判所ニ呈ス可シ第四十七條及四十
八條ヲ見合スヘシ

第二 原告人ノ述フル所非理不實ニシテ辯解ス可キ確
證アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ
書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書
ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏
名連印アル可シ附錄第十三号
ヲ見合スヘシ

第四 答書ノ末ニ書スル氏名其本人ノ自筆ヲ用フ可
書シ若レ本人自書スルヲ能ハサル時其旨ヲ氏名ノ肩
ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニレテ一行十五字詰テ認メ正副二
通ヲ具ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事
第三十四條 被告人自ラ答書ヲ書スルヲ許サズ必ズ代書
人ヲシテ代書セシム可シ其代書人ヲ撰定タル時ハ即日
裁判所ニ届ケ且原告人ニ報告スヘシ其他代書人ヲ用フ
ル方法ハ第三條第四條第五條第六條ニ照ス可シ

第三章 代書人ノ事

第三十五條 被告人ノ代言人ヲ用ルモ亦其情願ニ任ス然レモ必ズ本人自ラ同伴シテ訟庭ニ出席シ其結局ハ本人ヨリ決答ヲ為ス可レ

第三十六條 被告人代言人ヲ出ス時ハ答書ノ與書及ヒ連印等ノ方法第三十條ニ照スヘレ

第三十七條 答書ニ關係スルノ書類ハ代言人又ハ保證人ノ類ト雖モ被告人ノ證ト為ルヘキ者ハ被告人ノ撰ミタル代書人ヲシテ代書セシメ且ツ代書人ノ氏名ヲ記入セシム可レ被告人ノ自書ヲ用フルヲ得ス
書面ノ末ニ署名スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ヒ代書人ヲシテ代書セシム可カラズ若シ本人自署名スルコト能ハサ

ル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可レ

第四章 原告人ノ返リ證文ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原告ノ證書ヲ

還付セサルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告人其答

書ニ返リ證文返證文ハ債主ヨリ原告ノ証書ヲ還付セシムニ

ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ為シタル旨ヲ書ス可

第三十九條 原告人米金等ヲ受取リタルノ證書ニシ

テ貸附ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑

據トスヘキ證跡ナキ時ハ其米金ヲ受取クルノミノ證書

ヲ以テ返リ證文ト看做スルヲ得ス

第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ

事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟ス可キ期限ニ至リ負債主

ヨリ債主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ビ其證書ニ押印

ヲ為シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル

答書ハ對談一札對談一札トハ返濟延期ノ證書ヲ云フアルコトヲ記レ次ニ其

證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタルコトヲ書

ス可シ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨ

リ起リ債主本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主

ナル者已レハ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原

告人破約ノ證ト為スコトヲ得ヌ

第六章 原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其

偽造ヲ證スル為ニ管轄町ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ

人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相

違シタル者ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分限ヲ爭フ答書ノ方

法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件

ハ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取ヘキ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ為ントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ為スノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未ク

訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ為ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センコトヲ答ルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非サルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ為シタル答書ノ事
第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辯解スルヲ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議ニ對決前ニ解訟ヲ為シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ為サシム可シ附録第十四号ヲ見合マヘシ
第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ニ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照スヘシ各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟

和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ為シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人_之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セシトスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ為サシム可シ 附錄第十五号ヲ見合スヘシ

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ為シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋

友ヨリ被告人ノ負債ヲ延時代償セン_トヲ請ヒ原告人_之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延時代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ為サシム可シ 附錄第十号ヲ見合シ

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ為シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延時代償セン_トヲ請ヒ原告人_之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延時代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ為サシム

可シ 附録第十七号
ヲ見合スヘシ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

訴答文例附録

第一號

訴狀表紙ノ式

美濃紙大半紙又ハ右寸
法ニ同シキ紙ヲ用ユヘシ

某年某月某日

某訴狀

原告人	被告
住所	
身分	
氏名	

某、訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴フルハ貸金催促ノ
訴狀ト記シ流質地ノ争訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記

仁身借必換

スノ類

訴状ノ式

某訴

原告人
住所
氏分
名

被告人
住所
氏分
名

標記云々

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日

氏分
名印

代書人
住所
氏分
名印

某
御裁判所

第二號 代金催促ノ訴状

貸金催促ノ訴

原告人
住所
氏分
名

被告人
住所
氏分
名

式目昔必集

卷四

訴訟規則上訴答文例附録

〇十九

一元金何圓 年月日貸附
年月日期限

一利金何圓 一年又二月幾分利

合何圓

右證文ノ寫左ノ如シ

一金何圓

右云々

借主

氏名

證人

氏名

貸主

名當

右原告人氏名申上候云々

年月日

住身分 氏名印

代書人 住身分 氏名印

某

御裁判所

第三號 賣掛代金淹滞ノ訴状

原告人 住身分 氏名

賣掛代金淹滞ノ訴

被告人
住所
氏分
名

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御坐候

但帳面ニ被告人ノ證印有之候

若賣掛帳ニ非スレテ證文ナレ

ハ其證文全文ノ寫ヲ出ス可シ

右原告人氏名申上候云々

年月日
原告人氏名申上候云々
氏
名印

某

御裁判所

代書人
住所
氏分
名印

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

原告人
住所
氏分
名

買附米引渡違約ノ訴

被告人
住所
氏分
名

此項備必換

一 米何石 年月日買取約定濟
此度受取可キ石高

代金何圓 何圓替

内何圓 年月日手附金トノ渡濟

殘何圓 年月日限現米引替ニ渡ス
ハキ約定

右約定證書ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏名印

代書人 住所 氏名印

其

御裁判所

第五號 賣附生系代金引渡違約ノ訴狀

原告人 住所 氏名

賣附生系代金引渡違約ノ訴

被告人 住所 氏名

一金何圓 年月日限生系引替ニテ
受取ル可キ殘金高

弋貝詰必集

卷四

訴訟規則上訴答文例附録

〇廿

備付必抄

一元金何圓
年月日生糸何斤賣附
約定、金高

但何斤、付何圓替

內何圓
年月日手附金トシテ
受取濟

右約定證書、寫左、如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日 氏名印

住所身分

代書人 氏名印

某 御裁判所

第六號 妻離別ノ訴狀

妻離別ノ訴

原告人 住所身分 氏名

被告人 住所身分 氏名

夫 氏名 當何歳

妻 氏名 當何歳
年月日娶ル

某御役所ニ差出置候年月日ノ户籍人
別帳ノ寫左ノ如シ

人別帳云々

訴訟規則上訴答文例附録

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏名印

住所身分

代書人

氏名印

前書申上候處相違無御坐候

年月日

原告人祖父母
父母等

氏名印

氏名印

某御裁判所

第七號 經界ノ争ヲ繪圖式

年月日ノ原圖
年月日寫之

何故ニ

原告人
住所身分
氏名印



何村
黄色

第八號 原告人三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴状

被告 何村
黄色

某ノ訴

原告人 住所 氏名

被告人 住所 氏名

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

代理人 住所 氏名 印

代書人 住所 氏名 印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申上答ニ御座候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何之誰ニ總代相頼候然ル上何ノ誰ヨリ申上候事柄并ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上間敷候為後證與印仕候

年月日

住所 氏名 印

住所 氏名 印

代
規
借
必
準
了

卷四

訴訟規則上訴書文例附録

〇廿五

何れも
御裁判所

某
御裁判所

代書人
住所
身分
氏
名印

第九號
被告人連名中脱走又ハ病死人アルノ訴狀

某ノ訴

原告人
住所
身分
氏
名
被告人
住所
身分
氏
名

被告人
住所
身分
氏
名
右何之誰ハ年月日脱走致シ候段何柵役
人何之誰ヨリ承知仕候

被告人
住所
身分
氏
名
右何之誰ハ年月日死亡致シ候段何柵役
人何之誰ヨリ承知仕候

右原告人氏名申上候云々
年月日
氏
名印

代書人
御裁判所
訴訟規則上訴書文例附録
〇其

年月日

某

御裁判所

代書人

住所

氏

名印

第十號

讓證文ヲ以テ催促スル訴狀

某ノ訴

原告人

住所

氏

名

被告人

住所

氏

名

一 元金何圓入
一 利金何圓

合 何圓

右證文ノ寫左ノ如シ

證書云々

右讓證文ノ寫尤ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

代書人

住所

氏

名印

借必抄

卷四

某
御裁判所

第十一號 代言人ヲ頼ハ訴状

某ノ訴

原告人

住所

氏分

名

被告人

住所

氏分

名

標記云々

右原告代言人氏名申上候云々

年月日

氏名印

代書人

住所

氏分

名印

前書之儀私ヨリ御願可申上等御座候處何々ノ旨
趣ニ付何之誰江代言相頼候然ル上六何之誰ヨリ申上候
事柄并ニ御受申上候事柄共後日ニ至リ私ヨリ異議
申上間敷候為後證與印仕候

年月日

原告人

住所

氏分

名印

某
御裁判所

借必抄

卷四

訴訟規則上訴答文例附錄

〇廿八

第十二號 一時假リノ代言人ヲ出ス證書

當日代言人

住所 身分

氏名 印

右ハ何々ノ儀私ヨリ訴出候ニ付罷出委曲申上度奉
存候處病氣ニ付今日限何之誰_江代言相頼候若御尋
之儀同人ニテ御對申上兼候廉有之候ハ私快氣次
弟罷出可申上候

年月日

住所 身分

氏名 印

代書人

住所 身分

氏名 印

某

御裁判所

第十三號

答書表紙ノ式

用紙寸法第一号
訴状ノ添ノ如シ

年月日

某ノ答書

住所

身分 氏名

答書ノ式

仁興備心抄

某ノ答

右住所身分何之誰何々々儀訴出候三付今何日御呼出
之御状拜見仕御答申上候

私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ

右之通御坐候

年月日

氏名印

住所
身分
被告人 氏名

某
御裁判所
代書人 住所
身分
氏名印

第十四號 對決前熟議解訟ノ答書

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何之誰何々々儀訴出候付今何日御呼出

住所
身分
被告人 氏名

訴訟規則上訴答文何附録

〇三

之御状拜見仕原告人_江熟談濟方仕候趣申上候
私儀云々

年月日

氏名印

住所身分

代書人 氏名印

前書被告_人何之誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候付

此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所身分

原告人 氏名印

年月日

住所身分

代書人 氏名印

某

御裁判所

第十五號 對決前返濟延期ノ約定ヲ為シタル答書

住所身分

被告人 氏名

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼出
之御状拜見仕原告人_江熟談之上濟方日延約定仕候
段左之通御坐候

貸借必携 卷四

私儀云々

年月日

氏名印

住所

代書人

氏名印

前書被告人何之誰申上候通熟談之上濟方日延約

定仕候付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

住所

原告人

氏名印

年月日

住所

代書人

氏名印

某

御裁判所

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シテ解訟ノ答書

住所

被告人

氏名

身分

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々儀訴出候付今何日御呼出之

御狀拜見仕原告人^江熟談之上^{親族}中何之誰ヨリ日延

代償約定仕候段左之通御座候

私儀云々

貸借必携

卷四

訴訟規則上訴答文例附録

〇世

借以抄
卷四

年月日

氏名印

代書人 住所 身分 氏名印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ日延代償之約
定仕候段相違無御坐候

年月日 代償人 住所 身分 氏名印

代書人 住所 身分 氏名印

前書被告人何之誰申上候通私共承諾仕候付此上
對決之御裁斷不奉願候

第十六號

年月日	原告人	住所	身分	氏名印
	代書人	住所	身分	氏名印
某	御裁判所			

第十七號 對決前他人代償之延期ヲ約シタル答書

被告	住所	身分	氏名印
某、訴何之誰代償濟日延ノ答			

弋貝昔小推了

卷四

訴訟規則上訴答文例附錄

〇世三

借必抄

右住所身分何之誰何々儀訴出候付今何日御呼出
之御狀拜見仕原告人^江熟談之上^{親族}中何之誰ヨリ
代償濟方日延ノ約定仕候段左之通御坐候
私儀云々

年月日

氏名印

代書人 住所身分 氏名印

前書被告何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日
延ノ約定仕候段相違無御坐候

年月日

代償人 住所身分 氏名印

前書被告何之誰申上候通熟談之上何之誰ヨリ代
償濟方日延約仕候付來何年何月何日迄御裁判御猶
豫奉願候

年月日

原告人 住所身分 氏名印

代書人 住所身分 氏名印

其 御裁判所

借必抄

卷四

訴訟規則上訴令文例附録

〇卅四

第十八號 外國原告人訴狀ノ式

訴狀

原告人 氏名

本國住所
身分

被告人 氏名

住所
身分

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所
左之通訴訟申上候

第一云々 但シ訴訟ノ根源事實ノ大略ヲ明

第二云々 白ニ認マヘシ若其事實混交シテ長

第三云々 文ナル時ハ第一第二第三條トシテ區別

依之原告人ヨリ御裁判所江云々被成下度願上候事

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ

金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト認

其他公正ノ御裁判ヲ願フ趣ヲ認マヘシ

日本地名 原告人 氏名花押

若シ原告人ノ代言者アル時ハ左ノ如
ク加判スヘシ

代言人 氏名花押

其

裁判所長
氏名

訴答文例附錄 終

○癸酉九月七日太政官第三百十二號

訴答文例附錄中訴狀宛所某御裁判所ト有之處每號トモ
同第十八號書式ノ通り相定候條此旨更ニ布告候事

○癸酉十月十日太政官第三百三十九號

本年七月第二百四十七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ
有之當分御國人ノ遵守候儀ト可相心得此旨布告候事

○己巳六月 民部官御布達

各府縣ニ於テ取捌候公事出入之儀其管轄所外ハ差跨候
事件ハ添翰致シ當官ハ可差出候此段更ニ相違候事

○同月 同上

府藩縣其支配中ヨリ當官ハ出訴致候者ハ其府藩縣ニ於
テ訴狀ハ印章相添差出可申事

但相手方返答書並添翰ハ印章可致候附テハ印鑑ニ
枚ツ、早々當官ハ差出可申事

○同月十二日同上

先般相違候府藩縣ニ於テ差跨候公事出入之儀各其管轄
所ニ於テ申談取捌候儀ハ勿論ニ候トモ訴答人突合不

信備必抄
卷四

致吟味候而難決事件ハ別紙雛形之通印章相居ハ添翰ヲ以訴人可被差出然ル上訴狀ハ相手方管轄之府藩縣ハ相違候間速ニ返答書被申付則印章ヲ居ハ返答人當官ハ可被差出候右尚又相違候也

各府藩縣
印章

何國何村^何色^何相掛リ候
何之出入訴狀

何之^{府支配所}
何國何郡何村
年號月日
訴訟方
外何人

印章

何國何村誰ヨリ被相手取候
何之出入返答書

前同斷
肩書
相手方
外何人
年号月日

印章

何々之儀
願書
伺書

前同斷

信備必抄
卷四
訴訟規則上
〇飛

年号月日

肩書

左
外何人

官社以下神主等訴訟取捌ノ事

○庚午七月十三日辨官ヨリ刑部省へ御達

別紙之通神祇官ヨリ伺出候ニ付以後都テ御省へ可相渡

旨相達候尤是迄免角澁滞致候内情ヨリ伺出候様相見候

ニ付可成丈澁滞不致候様精々御取計可有之依テ別紙添

此段申入候也

官社以下府藩縣管轄之神社並神主等訴訟及出入等ノ儀
一切糺問筋之儀ハ從來當官取扱ニ不及當官ニ於テハ神

祇之政務一向タル儀勿論之儀ニ付右等之取調都テ彈正
臺へ差付候事ニ有之候處凡神社ノ爭論或ハ神佛取別等
之事件ヨリ差違又ハ神主職業之違亂社領之出入地方ニ
引合等有之候處々々神祇之筋ニ關係致候儀ハ他向ニテ取
捌難キ儀ニ有之ニ付彈正臺ニ於テ取調ニ不及其儘當官
へ差向候儀ニ有之候へトモ前意之如ク當官糺問筋取合
不仕候ニ付其趣ヲ以テ彈正臺へ再應差返候事ニ有之右
等ニ付テハ雙方讓合ト相成甚遲滞ニ及ヒ本人殊々外困
窮致候様子尤神祇之筋合ニ於テハ他向ニ於テ不分明ノ
儀ニ可有之右等之次第ニ成行候ニ付テハ追々神祇之公
事訴訟等當官取調不仕他向ニテ扱方運無候様相見候テ

ハ自然狡黠ノ手段ヲ企不謂詠訟箱詠等ニ及候族モ出來
仕以之外ノ儀ニ押移可申哉ニ付此以後前件之通詠訟吟
味モノ等當官ニ於テ專ラ關係有之品々ハ一應取調致候
テ其上糺彈推考等ノ儀ハ夫々其筋へ引渡不都合無之様
致度候間此段御聽置可被下候事

庚午七月十二日

神 祇 官

辨 官 御 中

附紙

詠狀等之儀以後都テ刑部省へ可引渡尤澁滯不相成様
同省へモ相達置候事

○庚午十一月廿八日御布告

府藩縣管轄交渉之詠訟是迄民部省ニ於テ裁判候處自今
府藩縣ニ於テ裁判被仰付候條別紙規程ヲ照準シ處置可
致事

府藩縣交渉詠訟准判規程

第一條

凡詠訟ヲ准判スルハ其本人ニ限ルヘシ若シ疾病老幼或
ハ廢疾等ニテ親族其他ノ代人ヲ請フキハ事實ヲ糺訊シ
止ヲ得ザレハ其請ヲ許スヘシ

第二條

凡詠狀士族卒ハ官長平民ハ里正ノ與印ヲ押スヘシ其與
印ナキハ詠詞理アリト雖モ之ヲ准理スヘカラス

但官長里正依怙偏頗ヲ狹ニ其情實ヲ壅塞セシムル時
ハ審按廉察シ與印ナシト雖モ准理シテ冤枉ナキヲ要
ス

第三條

治下ノ士民他ノ管内ノ者ト紛議ヲ生シ其裁判ヲ請フキ
ハ知事或ハ參事親シク推糺審問シ善ク訴狀ノ情實證據
ヲ明ニシ條理正當ナレハ副書ヲ作り廳印ヲ押シ訟者士
卒ハ差添人平民ノ里正ト其本人トニ授付シ對答人ノ管
轄廳ニ送り其裁判ヲ受シムヘシ

第四條

他管轄廳ノ副書ヲ以テ我カ斷訟ヲ請フ者アラハ先ッ其

訴狀ヲ按シ訴人ヲ推問シ原情ヲ得ルキハ訴ラル、ノ本
人並ニ士卒ハ差添人平民ハ里正ヲ呼出シ右訴訟ノ件十
日ヲ限リ證據確實謫詐ナク答書セシムヘシ
但中元歲終ハ兩季ニ迄ツクキハ必ス十日ヲ限ラスシ
テ可トス

第五條

日限中訴答ノ者對談熟議シ共ニ内濟ヲ請フキハ雙方ノ
連署狀ヲ出サシメ後言ナキヲ相證セハ之ヲ允シ其告趣
ヲ記載シ訟者ノ管轄廳ニ復スヘシ
但對談熟議ノタメ日限猶豫ヲ請フキハ五日乃至十日
ノ延期ヲ許スヘシ

第六條

對答者ノ事實訟者ハ旨意ト大ニ反スルキハ其顛末ヲ認メ答書ヲ作ラシメ官長或ハ里正コレニ與印ヲ押シ士卒ハ差添人平民ハ里正ヲ副ヘ本人ト共ニ訟者ノ管轄廳ニ送ラシム

第七條

聽訟第一次ハ必ス知事或ハ參事庭ニ莅シテ審判ヲ掛リ屬モ之レニ倍ス其日裁決セザルトキハ第五次コリ屬ヲシテ聽カシムルモ可トス屬兩個並坐審紀ス若シ事重大ニ涉リ或ハ訴ヘ重罪ニ至ルベキハ再三知參事紀問テ決シテ
第八條

訴訟斷決スルトキハ雙方連署ノ受書ヲ出サシメ永ク異論ナキヲ證セシメ其書ノ寫ヲ訟者ノ管轄廳ニ送達スヘシ

第九條

聽訟初日ヨリ百日ニ至リ事理盤錯兩情乖戾シテ決シ難キハ其糾問ノ始末審ニ記載シ之レヲ訴答ノ者ニ示シ謬違ナキヲ證印セシメ且廳印ヲ押シテ訴答ノ者ニ授付シ部省ニ出シテ裁斷ヲ受シムヘシ
但金穀其他貸借ノ訴訟ハ解訟ヲ度トナシ限ルニ百日ヲ以テスヘカラス且訴答ノ者疾病其他ノ事故アリテ時日遷延スルトモ宜シク斟酌シテ日ヲ長ク可ラス

第十條

百日ニ至リ決シ難キ訟ヲ民部省ニ出ストキハ其始末ヲ記載シテ訟者ノ管轄廳ニ達シ民部省ノ裁決ヲ請フヘキ事ヲ報スヘシ此時ニ至リ訟者ノ廳官異議アルヘカラス

第十一條

民部省ニ出シテ裁斷ヲ請フ事ヲ訟答ノ者ニ達シテ後十五日ヲ以テ發途ノ期トナス若シ其期ヲ遲緩セハ越度タルヘキ旨ヲ示スヘシ

但訟答者ノ内郷里其廳ト遠隔シ往復調度ノ事ニ付十五日ニシテ發途シ難キ者ハ相當ノ日限猶豫スヘシ

第十二條

訴訟斷決スルトキハ雙方連署ノ受書ヲ出サシメ永ク異論ナキヲ證セシム其書ノ寫ヲ訟者ノ管轄廳ニ送達スヘシ

第九條

聽訟初日ヨリ百日ニ至リ事理盤錯兩情乖戾シテ決シ難キハ其糾問ノ始末審ニ記載シ之レヲ訟答ノ者ニ示シ謬違ナキヲ證印セシメ且廳印ヲ押シテ訟答ノ者ニ授付シ民部省ニ出シテ裁斷ヲ受シムヘシ

但金穀其他貸借ノ訴訟ハ解訟ヲ度トナシ限ルニ百日ヲ以テスベカラス且訟答ノ者疾病其他ノ事故アリテ時日遷延スルトモ宜シク斟酌シテ日ヲ限ル可ラス

第十條

百日ニ至リ決シ難キ訟ヲ民部省ニ出ストキハ其始末ヲ記載シテ訟者ノ管轄廳ニ達シ民部省ノ裁決ヲ請フヘキ事ヲ報スヘシ此時ニ至リ訟者ノ廳官異議アルヘカニス

第十一條

民部省ニ出シテ裁斷ヲ請フ事ヲ訟答ノ者ニ達シテ後十五日ヲ以テ發途ノ期トナス若シ其期ヲ遅緩セハ越度ナルヘキ旨ヲ示スヘシ

但訟答者ノ内郷里其廳ト遠隔シ往復調度ノ事ニ付十五日ニシテ發途シ難キ者ハ相當ノ日限猶豫スヘシ

第十六條

田畑山林質地等ノ訴訟ハ總テ其管轄ノ廳ニ於テ裁決ス故ニ訟者田畑山林ト共ニ我管内ノモノナレハ第十四條ノ如クシテ他ノ答者ヲ召シ廳屬副スル訟者我管内ノ者ニシテ田畑山林他ノ管轄ナル者ハ第三條ノ如クシテ答者ノ廳ニ遣シ裁判ヲ受シムヘシ熟談等ハ前ニ掲ル條々ノ如シ

第十七條

既ニ裁斷スル事件ト雖モ訟者再訴スル所ノ證據ニ比較シ前裁斷至當ナラザル者ハ民部省ニ伺ヒ更ニ裁斷スヘシ

信
借
必
携
考
四

但再訴セザルモ前裁斷ヲ改メザルヘカラザル事件ヲ
ラハ條理本末詳ニ記載シ明確ノ證據ヲ以テ民部省ヘ
伺ヒ更ニ裁斷スヘシ

第十八條

遠國ノ者其滯留スル地ノ士民ト爭論ヲ生レ直チニ其地
ノ廳裁ヲ請フ者ハ旅宿主人又ハ其地親族ノ者差添訴出
ルキハ准理裁判シ且斷決ノ上其始末ヲ記載シ訟者ノ管
轄廳ニ達スヘシ
但百日ニ及ヒ斷決ニ至ラサルキハ之ヲ訟者ノ廳ニ達
シ民部省ニ出スヘシ

第十九條

管内滯留スル兩個ノ旅人 警ハ長寄函館ノ者東 紛議ヲ起
シ其地ノ旅宿或ハ親族ヲ證人トシ直チニ其裁判ヲ請フ
ルハ前條ノ如シ

第二十條

訴訟中訴答者ノ内死スルキハ其狀ヲ審按シ疑事アラハ
精竊ニ窮治スベシ疑事ナキモ差添人又ハ里正ノ證書ヲ
取リ其管轄廳ニ達スベシ

第二十一條

訴訟中訴答者ノ内亡命スルキハ其管轄廳ニ達シ百日ヲ
期トシ搜索セシムベシ

第二十二條

訴訟規則上

〇四

凡訴訟ノ原由訴答者ノ管轄廳吏ニ連及シ裁斷シ難キハ
速ニ民部省ニ出スヘシ其裁判ニ得ヘキモ決テ同省ニ伺
フヘシ

○辛未六月廿二日御布告

府藩縣管轄交渉之訴訟准判規程令般御詮議之上別紙之
通御改正相成候條此旨更ニ相違候事

辛未改正

第一條

訴訟本人ニ限リ止ラ
得サレハ代人ノ事

凡訴訟ヲ准判スルハ其本人ニ限ルヘシ若シ疾病老幼或
ハ廢疾等ニテ親族其他ノ代人ヲ以テセンコトヲ請フキハ
事實ヲ糾訊シ止ラ得サレハ其請ヲ許セ妨ナシ

第二條

訴狀
印ノ事

凡訴狀士族卒ハ支配頭平民ハ名主年寄等ノ奥印ヲ押ス
ヘシ其奥印ナキハ之ヲ准理スベカラス

但支配頭名主年寄等若シ其情實ヲ壅塞スルアラハ奥
印ナシト雖モ准理シテ冤枉ナキヲ要ス

第三條

副書ニ聽印ヲ押シ答
者ノ管轄ニ送ルノ事

治下ノ士民他ノ管内ノ者ト紛議ヲ生シ其裁判ヲ請フキ
ハ親シク其情實證據ヲ抵糾審明シ條理正當ナレハ副書
ヲ作り廳印ヲ押シ訟者ニテタヘ差添入ト共ニ答者ノ管
廳ニ送り其裁判ヲ受シ可シ

第四條

答者ヲ呼出シ答
書ヲシムルノ事

訴訟規則上

他管轄廳ノ副書ヲ以テ我カ裁判ヲ請フモノアラハ先ツ
其訴狀ヲ按シ訟者ヲ推問シ原情ヲ得ルキハ答者並ニ差
添人ヲ呼出シ右訴訟ノ件十日ヲ限リ答書セシムヘシ眞
印ノ如キハ第二條ニ準ス最モ中元歳終ノ兩季ニ近ツク
キハ必ス十日ヲ限ラスシテ可ナリ

但日限中若シ訴答者對談熟議ニ共ニ内濟ヲ請フコト
ラハ雙方ノ連署狀ヲ出サシメ其請ヲ許ス旨ヲ訟者ノ
管轄ニ復スベシ尤對談熟議ノタメ日限猶豫ヲ請フキ
ハ五日乃至十日ノ延期ヲ許スヘシ

第五條

訟者數名管
廳各異ノ事

一事件ニシテ訟者數名ニ涉リ管廳各異ナルキハ證書ニ

連署セル首名ノ管廳ニテ推紀シ答者ノ管廳ヘ送達スヘ
シ但答者數名ニ涉リ其管廳ヲ異ニスルモ亦本條ニ準ス

第六條

(訴訟斷
決ノ事)

訴訟斷決スルトキハ雙方連署ノ受書ヲ出サシメ永ク異
論ナキヲ證セシメ其書ノ寫ヲ訟者ノ管廳ニ送達スベシ
但訴答突合、後對談熟議シ共ニ内濟ヲ請モノアラハ
第四條但書ニ準スヘシ

第七條

(聽訟百日ニ至リ決
シ難キモノノ事)

聽訟初日ヨリ百日ニ至リ事理盤錯兩情乘戾シテ決シ難

民事訴訟法 第四

キ其糾問ノ始末審ニ記載シ之ヲ訴答ノ者ニ示シ謬違
ナキヲ證印セシメ且廳印ヲ押シテ訴答ノ者ニ授付シ民
部省ニ出ノ裁斷ヲ受シハヘシ尤其始末ヲ記載シ訟者ノ
管廳ニ達スヘシ
但金穀其他貸借ノ訴訟ハ解訟ヲ度トナシ限ルニ百日
ヲ以テスヘカラス

第八條 (訴答發途期限ノ事)

民部省ニ出シテ裁斷ヲ請フ事ヲ訴答ノ者ニ達シテ後十
五日ヲ以テ發途ノ期トナス若シ其期ヲ遲緩セハ越度ク
ルヘキ旨ヲ示スヘシ尤訴答者ノ内郷里其廳ト遠隔シ往
復調度ノ事ニ付十五日ニシテ發途シ難キ者ハ相當ノ日

限猶豫スヘシ
但發途後ト雖モ對談熟議シ内濟ヲ請フ者ハ第四條但
書ノ如クシテ之ノ許スヘシ

第九條 (訴答者裁判ニ服セサルノ事)

百日ニ至ラザルモ訴答者ノ内其裁判ニ服セス民部省ノ
聽訟ヲ請ノトアラハ其始末ヲ記載シテ民部省ヘ出スヘ
シ

第十條 (隄防用惡水及ヒ村市山林等境界彼我管轄交牙ノ地)

隄防用惡水及ヒ村市山林等境界彼我管轄交牙ノ地ニ關
涉ノ訴訟ハ訟者ノ管廳ヲ主ト為シ訴狀ニ其廳印ヲ押シ
關涉ノ廳ニ達スヘシ關涉ノ廳ハ答者並ニ差添人ヲ出シ

民事訴訟法 第四 〇四七 訴訟規則上

テ答書ヲ作ラシメノ狀情證據ヲ糺問シ其廳屬ヲ副テ訟者
 ノ管廳ニ送り聽訟ノ庭ニ蒞マシメ與ニ地圖ヲ檢査シ契
 券ヲ照準シ簿冊ヲ檢閲シ或ハ實地ニ就テ協議審判スヘ
 シ其裁決ニ至リテハ都テ斷案ヲ作り民部省ヘ伺ヒ出ツ
 ヘシ

但訴狀ヲ受ルヨリ答書ヲ送ルノ間尋常十日ヲ以テ期ト
 ス然レモ尚査按ヲ加ヘキ事件ハ此期ヲ必トスヘカラ
 ス

第十一條

(境界論地ハ對談熟議ヲ許サス限防
 用惡水害ナキハ解訟セシムルノ事)

境界論地ハ詳裁審斷シ必ス對談熟議ヲ許スヘカラス限
 防用惡水ハ實地水路ヲ檢査シ彼我害ナキハ宜シク說諭

ヲ加ヘ熟議解訟セシムヘシ

第十二條

田畑山林等ノ地所ニ
 關係スル訴訟ノ事

田畑山林等ノ地所ニ關係スル訴訟ハ總テ其管轄ノ廳ニ
 於テ裁決ス故ニ訟者田畑山林ト共ニ我管内ノモノナレ
 ハ第十條ノ如クシテ他ノ答者ヲ召シ廳屬副スル訟者我
 管内ノ者ニシテ田畑山林他ノ管轄ナル片ハ第三條ノ如
 クシ答者ノ管廳ニ遣シ裁判ヲ受シムヘシ熟談等ハ前ニ
 掲ル條々ノ如シ

第十三條

(遠國ノ者其滯留スル地
 ノ士民ト爭論訴訟ノ事)

遠國ノ者其滯留スル地ノ士民ト爭論ヲ生シ直チニ其地
 ノ廳裁ヲ請フ者ハ旅宿主人又ハ其地親族ノ者差添訴出

ル片ハ准理裁判シ且斷決ノ上其始末ヲ記載シ訟者ノ管廳ニ達スヘシ

但百日ニ及ヒ斷決ニ至ラザル片ハ之ヲ訟者ノ管廳ニ達シ民部省ニ出スヘシ

第十四條

管内滯留スル兩個旅人訴訟ノ事

管内滯留スル兩個旅人譬ハ長寄函館ノ者東シ其地ノ旅宿或ハ親族ヲ證人トシ直チニ其裁判ヲ請フ

片ハ前條ノ如シ

第十五條

訴答者ノ内死スルノ事

訴訟中訴答者ノ内死スル片ハ其狀ヲ審按シ差添人ノ證書ヲ取り其管轄廳ニ達スヘシ

○他府縣廳ハ關涉訴訟ノ事對共一熟慮ニ付先般准判規程御布告相成居府縣人民交渉ノ訴訟裁判差

支無之候得共府縣廳ハ關係ノ事件ハ當分當省ニテ裁判不致候テハ下情壅塞ノ患ニ有之就テハ右方法准判規程中洩居候間別紙案之適當省ヨリ布告致シ度此段相伺候也

辛未九月 司法省

正院 御中

御朱印

同之通

○辛未九月晦日司法省

他府縣廳へ關涉訴訟、訴人本管廳、添簡ヲ以當省へ可
申出事

但人民互、訴訟、准判規程、通可心得事

教導職出訴添翰ノ事

○壬申七月廿九日教部省ヨリ司法省へ打合

先般宮華族其他寺院之名目ヲ以貸附之金銀返濟方相
滯居候分、其旨裁判所へ相願可申出ト、公布有之然
處教導職補任之神官僧侶等當省所轄ニ候得、右出入
等裁判出願之節、添翰相願候儀モ可有之候處教導職
之儀、尋常官員トモ相違候ニ付其者本管廳へ添翰ヲ
以出願候儀允當、筋ト存候得共一應為念此段及御打

合候間早々御廻答有之度候也

同日司法省ヨリ教部省へ廻答

宮華族其他寺院之名目ヲ以貸附之金銀出入ニ付裁判
願出候節、教導職之者ト雖モ矢張其者本管轄廳添翰
ヲ以願出候儀當然之筋ニ有之候間左様御承知有之度
此段及御廻答候也

○壬申九月十九日司法省第十四號

從來訴訟入費ノ儀、原告被告共自費或、居村町之費用
ニ相成且證人引合、者等、他人爭訟、為、自己、職業
ヲ廢シ貧究、者ニ至リ候テ、家族活計、道ニモ差響往
々難滋致候者不少不都合、次第ニ付差向令般別紙規則

之通相定候條向後右入費之儀、原告被告ヲ論セ一切
曲者、一身ニ引受償辨スヘキ事

訴訟入費償却假規則

一 訴訟其外書類認料

一枚十六折十
一字詰ニ付
但一枚以下ニ同價

一 證人並引合人手當

但差添人、儀ハ追テ定
則相立候迄此例ニ依ル

一日
但他所ヨリ罷出止宿
者ハ廿五錢ヲ増ス

一 同旅費

但前同斷

一日
但歸路ニ同斷

一 被告人直ナル者手當

但原告人直ナル
時ハ此手當トシ

一日
但他所ヨリ罷出止宿
者ハ廿五錢ヲ増ス

一 同放費

一日
但歸路ニ同斷

一 通辨料

一日
但十六折十
一字詰ニ付
一枚以下ニ同價

一 翻譯料

一 使賃

半里以
内ハ五錢
但五里以上ハ歸路ニ
付里

一 郵便並電信料

一 身代限諸雜費

定價
臨時計案ニテ
定ハヘシ

右掲載スル所ノ外臨時入費有之節ハ其分トモ總テ直者
難儀ニ不成様曲者ヨリ取立可シ尤原告被告トモ曲直

相半スルキハ裁判所ニテ雙方ニ割合ニシテ償ハシムベ
ク且ツ雙方示談行届タル節ハ各自ノ費用ヲ計算シテ銘
々ヨリ償却セシムヘシ

○同日司法省ヨリ府縣ニ御達

訴訟入費取扱方之儀相違候處右ハ来ル十一月十五日ヨ
リ施行可致候此段相違候也

○壬申九月廿九日司法省第十七號

先般訴訟入費償却假規則布達致シ候未定限令又相違候

假規則
畧ス

○壬申十一月二日司法省第三十一號

去ル九月廿九日第十七號ヲ以テ訴訟入費償却假規則官

限布達致シ置候處此度改正更ニ左之通相違候事

第一條

訴狀其外書類認料

壹枚拾六行拾五字詰ニ付拾錢

但一枚以下モ同價

右定限

第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本

第二 被告人ノ答書ノ正本副本

第三 訴狀又ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ

寫

第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據

書類寫

第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方
往復ノ文書

第二條

證人並引合人手當

一日ニ付五十錢

但シ他所ヨリ罷出止宿ノ
者ハ二十五錢ヲ増ス

但差添入ノ儀ハ違テ定
則相立候迄此例ニ依ル

右定限

第一 裁判所ニ於テ審判又ハ言渡ヲ受シ日

第二 裁判所ノ腰掛ニ於テ原告被告雙方立合ノ示

談ヲ為シタル日

第三條

同旅費

一里ニ付十錢

但歸路モ同斷

但前同斷

右定限

第一 旅行ハ一日ヲ十里詰トス

第二 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ

甲路ヲ經ルト雖モ乙路ヲ以テ計算スヘシ

第三 瀛車又ハ瀛船ニ乗ル者ハ現ニ其里程ヲ以テ

計算スヘシ

第四 本條ハ日本管内ヲ通行スル者ノ為ニ設ク

第四條

被告人直ナル者ノ手當 一日ニ付五十錢

但他所ヨリ罪出止宿スル者ハ二十五錢ヲ増ス原告人直ナルキハ此手當ナシ

右定限

第二條ノ如クスヘシ

第五條

同旅費 一里ニ付十錢

但歸路モ同断

右定限

第三條ノ如クスヘシ

第六條

通解料 一日ニ付三圓

右定限

第二條第一第二ノ如クスヘシ往返旅費ヲモ定額ノ通

リ計算スヘシ

第七條

翻譯料一枚ニ付十六行十五字詰二圓一文字ハ一圓ニ

但一枚以下モ同價

右定限

第一條ニ同シ

第八條

使賃 一里ニ付十錢 半里以内ハ五錢

但五里以外ハ歸路モ同断

右定限

テハ明治六年二月一日ヨリ可施行此旨更ニ相違候事

○壬申六月十八日司法省決議

境論繪圖裏書之事 裁判所聽訟課伺

國郡村等ノ境界論ニテ實地檢査之上測量繪圖ハ裏書ヲ以裁判及ヒ原告被告ハ下ケ渡候節ハ右裏書ノ末ハ司法裁判所ト認可申候哉又ハ裁判所ト而已ニテ可然候哉至急御差圖有之度此段相伺候也
司法省指令

凡訴訟裁判ノ裏書等關係ノ官員連署致シ其事ノ大ナル者ハ冒頭ハ省印ヲ押シ可申其事ノ小ナル者ハ各裁判所ノ印ヲ押シ連署ノ人員ハ事ノ大小ニ依リ増減可

○有之事

○癸酉一月司法省第六號

先般相違候訴訟入費償却假規則ノ條中第二條第四條ノ但書ニ他所ヨリ罷出ト有之候處八里以外ノ地ヨリ罷出ト改正候間此段更ニ相違候事

○癸酉五月司法省第八十四號

當省壬申第三十一號訴訟入費償却假規則中ハ左之通致増補候事

一 測量繪圖認料

長三百間ニテ盡ル時ハ百間ニ付一尺ノ割合西ノ内一枚ニ付十錢長六百間迄百間ニ付五寸ノ割合西ノ内一枚

二付十二錢
長千二百間迄百間ニ付三寸ノ割西ノ内一枚ニ付十四錢

長六千間迄百間ニ付二寸ノ割同十七錢
長一万二千間迄百間ニ付一寸ノ割同二十錢
長一万二千間以上百間ニ付五分ノ割同廿四錢

一 測量ニ及ハサル見取繪面ハ間數ノ長短ヲ論ニス大凡ノ見積ヲ以テ簡便ニ圖引可致事
但西ノ内一枚ニ付十錢
右之通可相心得事

○甲戌五月十九日太政官第五十四號

第九十四号
明治七年五月廿五
四号布告民事控
訴略則相廢止
以条以布告以
事
明治八年五月廿
太政官三條
表

今般民事控訴略則左之通相定候條此旨布告候事

民事控訴略則 民事控訴トハ刑事ノ外總テ權利ノ妨害等裁判所へ訴フルヲ云

第一條 凡民事ニ付原告被告ノ内府縣裁判所或ハ裁判所
在ラサル縣廳ノ裁判ニ服セサル者ハ司法省裁判所ニ控
訴スルヲ得ヘキ事

第二條 司法省裁判所ニテ始テ受ケタル裁判ハ之レヲ臨
時裁判所ニ控訴スルヲ得ヘキ事

第三條 凡控訴ヲ為サントスル者ハ控訴狀ヲ認メ裁判言
渡シノ日ヨリ三月ノ期限内 三月ノ期限トハ此月此日ヨ
リ四月月目ノ此日迄ヲ云フ
裁判ヲ受タル裁判所ニ差出スヘシ裁判所在ラサル地方

ハ其縣廳ニ差出スヘキ事

但訴答文例第二十條見合スヘシ

第四條 控訴狀ヲ差出シタル時其裁判所或ハ縣廳ニテハ

一件書類ヲ其訴狀ニ添ヘ訴人ト共ニ直ニ其上ノ裁判所

ニ送付ス可キ事

○甲戌五月廿日司法省甲九號

令般裁判所取締規則左之通相定候條此旨相達候事

裁判所取締規則

第一條

訟庭ハ訴訟口詰必ス出席シ詞訟人ヲ順次ニ呼込ニ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ關ノ事アラサル様其取締ヲ為ス

ハキ事

第二條

原被告人ヲ始メ代言人等總テ訟庭ニ出ル者ハ呼込ノ次

第二從ヒ沈黙整列シ裁判官出席スルハ各起テ禮ヲ為ス

ハシ

第三條

原被等共其事情ヲ餘蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述ス可シト

雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレハ更

ニ其言ヲ發スヘカラス

第四條

凡進退動作ハ輕躁ニ涉ラヌ言語ハ憤怒高激ニ涉ラス諄

諄トシテ其事情ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致ス
ニ注意スヘシ

第五條

前條ニ記載シタルヲ守ラス裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク
モノアルトキハ裁判官直チニ譴責ヲ加フヘシ若シ之ヲ
再犯スル者ハ違式ノ輕重ニ問ヒ相當ノ罰金ヲ科スヘキ
事

但右譴責等ハ斷獄課ニ付スルニ及ハス其裁判官直チ
ニ申渡ス可シ

第六條

譴責又ハ罰金ヲ科スヘキモノアル時ハ其裁判ヲ中止シ

テ其犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然後犯則
ノ者ニ譴責又ハ罰金ヲ申渡スヘキ事

但其言渡書ハ其出席人ノ扣所ニ十日間貼附ヘシ

第七條

裁判官ヲ罵ル者アル時ハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之
ヲ斷獄課ニ付シ本律ヲ科ス可キ事

第八條

總テ裁判ハ衆人公聽ヲ許スト雖モ人々皆沈黙敬聽スヘ
シ

但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛鬧ニシテ審問ノ妨
礙アリト思量スル時ハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公

貸借少抄

聽者ヲ退ヅカシム可キ事

...

...

...

...

...

...

...

...

...

貸借必携券之四終

